特別寄稿

安倍元総理大臣の対中南米外交と中南米日系人社会

山田　彰（外務省参与、元中南米局長）

本年７月、突然の銃撃によって落命した安倍晋三元総理大臣について、その外交面での功績は様々な場で語られているが、対ラテンアメリカ・カリブ（中南米）外交上のそれについて論じられることはほとんどない。しかし、日本と中南米、そして特に中南米の日系社会との関係強化に関して安倍総理が果たした役割もまた極めて大きいものがある。

始まりはブエノスアイレス

2012年12月第二次安倍内閣が発足後、安倍総理は「地球儀を俯瞰する外交」を標榜し、かつてないペースで精力的に世界各国を訪問し始めた。それ以前、日本の総理は毎年のように変わっていたこともあり、総理が国際会議以外で中南米を訪問したのは2004年の小泉総理のブラジル・メキシコ訪問まで遡る[1]。新政権発足時、筆者は外務省中南米局長の職にあったが、総理の中南米訪問を何とか実現して日本と中南米関係を発展させたいとずっと考えていた。

安倍総理が最初に総理として中南米の地を踏んだのは、2013年９月アルゼンチンにおける国際オリンピック委員会（IOC）総会の機会だった。この総会で東京オリンピック招致が決定されたが、帰国する政府専用機の中で総理は随員一人一人と記念写真を撮った。その時、私は「総理は岸総理が実現した東京オリンピック招致をここ中南米の地で成し遂げました。中南米は、日本にとって、安倍総理にとって運気の良い場所です。今度は、岸総理が行った中南米歴訪を、１か月とは言いませんがせめて10日間かけて行ってください」と総理に向かって述べた。

岸総理が1959年に欧州と中南米諸国を約１か月外遊していた件は、IOC総会での投票を待つ昼食会の場で総理自身が出した話でもあった。私の直訴に対し、安倍総理は、「10日間ね、ふふふ」と笑っただけであったが、総理歴訪の機会は、翌年の夏に巡ってきた。

写真１　IOC総会から帰国する政府専用機内。筆者と安倍総理（2013年９月）（首相官邸提供）

歴史的な2014年の訪問

2014年７月25日から８月４日まで、安倍総理は、メキシコ、トリニダード・トバゴ、コロンビア、チリ、ブラジル（ブラジリアとサンパウロ）の５か国を訪問した。現地のメディアでは「日本が中南米に帰ってきた」との報道もあった。訪問には、政府関係者以外に、20～50名（国による）の企業CEO、大学や政府機関の長が同行し、ミッション全体では約250名に上り、政府間の会合だけでなく、民間関係者との会合も各地で開催された。安倍総理の言葉を借りれば、「この訪問は、日本と中南米との戦略的なパートナーシップの『新たな夜明け』となった」。

写真２　安倍総理夫妻とペニャ・ニエト・メキシコ大統領夫妻。テオティワカン遺跡にて（2014年７月）（筆者撮影。以下同）

トリニダード・トバゴ訪問は、日本の総理大臣として初のカリブ訪問となり、ここでカリコム加盟14か国の首脳を集めて、初の日・カリコム首脳会合を開催した。安倍総理は、「小島嶼国の特有の脆弱性に着目した、所得基準によらない支援の方針等、カリブ諸国に対する包括的な外交政策」を表明した。日本とカリブ諸国の関係においてまさに歴史的な首脳会合であった。

旅の終わりのサンパウロで、安倍総理は『Juntos!! 日本・中南米協力に限りない深化を』と題する中南米政策スピーチを行い、日本の対中南米外交における三つの指導理念を示した[2]。日本が中南米諸国と対

写真３　ブラジリアの日本大使公邸で日系人の皆さんと（2014年８月）

写真４　サンパウロ文協における総理歓迎会（2014年８月）

写真５　総理歓迎会に集まった日系人参加者全員と記念撮影（2014年８月）

等のパートナー、アミーゴとして、① 発展を共に、②主導力を共に、③啓発を共に、するというこの理念は、今も生き続けている。

この安倍総理の中南米歴訪は、日本と中南米の関係を新たな高みに引き上げるものになったと考えているが、訪問において最も大きな意義があったのは日系社会との関係強化の面であったと思う。

日系社会との関係

筆者は局長時代、日本と中南米日系社会との協力・連携を強化するため尽力していたが、なかなかそうした考えは省内、政府内に共有されず、苦心していた。2014年３月、歴訪前の総理に私が日程の概略を説明したところ、総理から唯一あった指示は「各地で日系人との会合の機会をしっかり作ってくれ」というものだった。この指示を聞いて、私は、安倍総理は日系社会のことを真剣に考えているのだ、と悟った。

実際に現地で、安倍総理はできるだけの時間を取って日系人の皆さんの話を聞き、多くの方と写真を撮り、日系社会を重視する姿勢を自らの態度と言動で示した。サンパウロでは、総理の指示により当初の予定を変更してまで、歓迎会に集まった1000人以上の日系人全員とグループごとの記念写真を撮影するという前代未聞のことも起こった。また、安倍総理はサンパウロで車中同行していた駐ブラジル大使に「この人たち（日系人）のことをしっかり頼みますよ」という趣旨のことをおっしゃったそうである。

日系人、日系社会を大事にするという総理のこうした姿勢は、同行した日本側政府関係者にも強い印象を与えたようであった。帰国後、官邸主導で多くの省が参加する中南米経済・文化交流促進会議が発足し、日系社会との協力が主要なアジェンダの一つとなるなど、総理の中南米訪問後日本政府の対日系社会政策は飛躍的に発展したのである。

その後の中南米各国訪問の際にも、安倍総理は必ず日系人との会合の機会を持ち、彼らを大事にする姿勢を示し続けた。日系人の方々も安倍総理が日系社会のことを真剣に考えていたことに深く感銘を受けていたと思う。

地球儀の中の中南米

在任中、安倍総理は中南米諸国を延べ７回訪問し、訪問国数は11（延べ14）にのぼり、うち６か国は日本の総理として初めての訪問であった。こうした首脳の訪問により、日本と中南米諸国の関係は、大きく前進した。長期政権でなければできなかった成果であろう。

世界中の様々な国・地域の存在を常に念頭に置いて、多面的に外交政策を考えるのが「地球儀を俯瞰する外交」だった。安倍総理は中南米を訪問した際も、それぞれの国の様々なことに関心を示し、首脳との会談や諸行事を楽しみ、中南米について多くのことを吸収しようとしていた。

（国によって日本にとっての重要度にはおのずから違いがあるにしても）いずれの国とも対等なパートナーとして付き合い、相手国の首脳と信頼感を構築するように努める――世界の指導者から届いた追悼のメッセージには、安倍総理のそんな姿勢への評価が反映しているように思える。

写真６　サッカー感謝の集い。ジーコ他、日本サッカーに貢献したブラジル著名選手と（2014年８月）

1　2008年麻生総理がAPEC首脳会合出席のためペルーを訪問、2012年野田総理がG20首脳会合出席のためメキシコ（ロスカボス）を訪問している。

2　Juntosはスペイン語、ポルトガル語で「共に」という意味。

（やまだ あきら　前駐ブラジル大使、元駐メキシコ大使。
ラテンアメリカ協会常務理事）